

## 厄介者の生き方

東京都杉並区 後藤 里奈

木々の葉が薄らと色づき始め、爽やかな初秋の風が吹くようになった頃、私の足は自然と千葉県市原市の立國寺へと向かった。源頼朝の故事より「出世観音」として知られる、日蓮宗の寺院だ。寺伝によると、鎌倉時代、石橋山の戦いに敗れ、九死に一生を得て海路安房国に逃れた頼朝が、再起をかけてこの山谷に立てこもり、甲冑に忍ばせていた観音像を奉斎して一心不乱に戦勝を祈願したという。その後、仲間の力を借りて下総から関東に攻め入り、天下を平定した。この由緒に因み、鎮座されたご神霊は「開運招福の守護神」「出世観音」と命名され、安置されている。このお寺に来るのは二度目だった。当時勤務していた学校がこの寺院にゆかりがあり、遠足で訪れたことがあったのだ。再び来ようと思ったのは、出世祈願のためではない。私も心のどこかで、再起を図ろうという淡い希望があったのだと思う。

その頃、私は仕事のストレスから心身を病み、半年間の休職を余儀なくされていた。だが、しばらく休んでも回復の兆しはなく、一日中、何をすることもなく鬱々と過ごしていた。長年の夢であったはずの教職を続けるべきか否か悩んでいたとき、救いを求めるようにして私はその寺院へ行こうと思いついたのだ。まるで、見えない力に導かれるかのようにだった。

東京を出発してから約三時間。小湊線・養老溪谷駅に降り立つと、不思議な懐かしさに身を包まれた。吹き抜ける風が頬に心地よい。おぼろげな記憶を頼りに三十分ほど歩くと、観音橋が見えてきた。眼下には清流・養老川が流れ、真つ赤な橋の上からは温泉街が見渡せる。旅の感情というものが徐々に高まってきた。けっこうなアップダウンのある橋を渡りきると、一心不動尊に出迎えられる、厳粛な気持ちになる。長い参道を歩きトンネルを抜け、境内へと続く階段をひたすら上る。久しく運動不足の体には少々過酷だったが、すれ違う参拝客に

「あともう少しです。頑張つて。」

と声をかけられ、元気が湧く。いったい自分はなぜ、こんな遠い寺院まではるばるやって来たのか、分からなくなってきた。だがこうして長く険しい道のりを歩いていると、自分の来し方を振り返っているようでもあった。暗いトンネルを抜ければ、少しは光が見えてくるのだろうか…。

修行僧にでもなった気分最後の階段を上って行くと、ようやく本堂を拜むことができた。黒塗りの落ち着いた様相は、何か謙虚な感じをさせる佇まいであった。人の心に訴える美しさとは、特に美を意識して作られたところからは生まれてこないものなのだろう。美しく見せるために加工した雰囲気は一切なく、ただ必要なものだけが必要なところに置かれているという印象を受けた。檀家のない小さな寺であるが、寺格のよさを思わせる、いい姿であった。自分の中から、一切の邪念が取り払われていくようだった。

だいぶ長いこと立ち尽くしていたのだろう。背後から

「よく作られていますでしょ。」

と、お寺の住職に声をかけられ我に返った。

「こちらにはよく参拝に来られるのですか？」と聞かれ、

「いえ、そういうわけでは……」

と曖昧に返事をする。思えば、こうして誰かと何気ない会話を交わすのも久しぶりだった。

「これはね、アテという木材で作られているんですよ。どうぞじっくり見ていって下さい。」

住職はそう言って微笑み、立ち去っていった。柔和な笑みが私の心をほっとさせてくれた。

帰り際、参拝の記念に札所で御朱印を頂いた。観音様の絵とともに手書きされた「一天四海皆婦妙法」というご首題を眺めていると、もうひと頑張りできそうな気がしてきた。日蓮聖人の本願であるこの言葉は、信者だからといって特別なことをするのではなく、呼吸をすることなど、自然なことを有難くできる精神に基づいているそうだ。皆がそうした心持ちであれば、平和な世の中が訪れるということなのだろう。どんな時も、当たり前前のことに感謝する気持ちを大切にしたいと、改めて思った。

来た道に戻りながら、私は縁というものの不思議について考えていた。目には見えないが、確かに存在するなんらかの結びつき。それは人と人との間だけに限らない。地縁というように、土地にも縁を感じることはある。生まれ故郷に愛着を持つのは当然

かもしれないが、そうでなくても強い引力のようなものを感じる場所というのがある。おそらくこのお寺は私にとって、そんな特別な場所なのだろう。今日ここに来なければ、私はあの住職に会うこともなく、本堂を見て感動することもなかったはずだ。そして、なぜだか私の心を惹きつけたあの柱組が忘れられなかった。「アテ」という木材について、もっと知りたくなったのだ。

調べてみると、アテとは言うなれば厄介者の木材であることが分かった。そこで余計に興味をそそられた私は、林業に携わる知人にアテを扱う同市の材木店を紹介され、早速訪ねてみることにした。すんなり育てば良材になったはずが、なんらかの環境の変化によってまっすぐたりえなかった木。内側に依怙地なねじれや歪みを抱えているがゆえに、材としてはまったく使い物にならないワルだ。辛さに耐えて生きてきたあげく、役立たずという汚名を着せられてしまう。そうして人の手に余る哀しさを思うと、つい同情したくなる。このワルは、一見普通の木材となんら変わらない。断面を見てもクセなどなさそうだ。だが棟梁が二回・三回と鉋で削ると、白木の色よりひときわ濃い紅色の筋が走っていた。それは、紛れもなく何かに耐えた痕跡・傷跡であり、滲んだ血のようで痛々しく見えた。

しかし、この厄介者は棟梁の采配ひとつで大きく生まれ変わる。アテの柱を何本か組み合わせ、内側に込められたねじれる力をそれぞれ相反するように配置すると、普通の柱で同じ本数だけ支えるよりも、ずっと丈夫な建材になるという。そうしてできたのが、

おそらく立國寺の柱組だったのだろう。地面で踏んばりねばった木は、材になっても踏んばり耐える。扱いづらい木だからこそ、そのクセを活かして使ってやるのが棟梁の力量というものだ。その職人魂に、私は再び感銘を受けた。そして、このアテの宿命を、自分自身と、また自分の生徒たちと重ね合わせずにはいられなかった。

私が教師を志したのは、中学生の頃、小説『二十四の瞳』を読んだことがきっかけだった。素直な子供たちに慕われ、強い信念を持って逆境に立ち向かう若き女性教師・大石先生に憧れを抱いたのだ。さらさらと目を輝かせる子供たちに、熱く人生訓を語る自分の姿を何度も想像しては、教職への思いを強くした。だが、念願叶って憧れの教師になったのも束の間、私の理想は早くも打ち砕かれてしまう。期待に胸を膨らませて臨んだ授業初日。私を待っていたのは、希望に溢れた澄んだ瞳ではなく、こちらを試すかのように睨みつける目、意欲を失い、何もかもを拒絶するかのような死んだ目であった。私が初めて赴任した学校は、不登校や非行などの問題を抱え、普通の高校には通えなくなった生徒が多く通う「サポート校」だったのだ。なかには、鑑別所から出たばかりで保護観察中の生徒もいた。

初めて接する「不良」の生徒たちに戸惑いながらも、最初のうちは「だからこそやりがいがあるのだ。彼らに学ぶ楽しさを教えてみせる」と意気込んでいた。けれども現実は厳しく、私の考えは甘かった。今までまともに勉強したことがなく、健全な人間関

係を築いたこともない彼らが、新米教師の言うことなど素直に聞くわけがない。授業中の私語や飲食、携帯ゲームは日常茶飯事。ひどいクラスでは人目をはばからず化粧をしたり、喧嘩が始まったりすることもしばしば。真正正銘の授業崩壊であった。恐るおそる注意をすれば、無視されるか「ウザい」「新人のくせに」と憎まれ口を叩かれる。少しでも学習内容に興味を持ってもらおうと、工夫を凝らして自作したプリントを配れば、私の努力はたちまち紙ヒコキとなって教室中を飛び交い、授業後にはくしゃくしゃに丸められて教室の隅に捨てられていた。保護者に電話をすれば、

「そっちの指導が悪い。教師失格なのでは？」と責められる。共に頑張ってきた同期の仲間たちも、「やってられない」「割に合わない」と言って一人、また一人と辞めていった。

数ヶ月経つても状況は変わらず、ついに私の我慢も限界に達した。私はこんな思いをするために教師になったわけではない。学校へ行くのが憂鬱になり、授業へ向かう足取りは日に日に重くなっていった。学校外で喫煙をする生徒を見かけても見て見ぬふりをし、そんな自分が情けなかった。もはや、教師としての理想も情熱も消えつつあった。自分のような指導力のない人間は、学校にとっても役立たずであろう。やはり自分には教師は向いてないのではないか……。しだいに自己嫌悪に陥り、何に対してもやる気を失ってしまった。木材として、最低の等級にすら入らないアテと、教師失格の烙印を押された自分は、まったく同じ境遇であるように思えた。

しかし、棟梁の話聞いて気がついた。本来なら良材になるはずが、何かの原因で歪んでしまった木材。子供というのも本来は、まっすぐ伸びたいと思ってるはずだ。自らひねくれないと思ってる子などいるはずがない。サポート校に通う子供たちも、皆それぞれの事情を抱えていた。複雑な家庭環境、発達障がい、いじめや学力不振……。助けて欲しいとサインを出していたにも関わらず、適切な支援を受けられなかったことも多かっただろう。学校では問題児、落ちこぼれとして居場所を奪われ、時には家庭でも厄介者として扱われてきた。表面では反抗し強がっていても、心の内には誰にも言えない辛さや悩みを抱えていることだってある。そうして徐々に荒み、心を閉ざしていった。

私は、自分自身の彼らに対する接し方を振り返ってみた。自分は今まで、本気で彼らと向き合っていただろうか。思えば、「こんなはずではなかった」「いつになったら報われるのだろう」という不平不満ばかりが募り、自分への関心だけが濃くなっていた。「ここまでして指導に従わないのなら、言うことを聞かない彼らが悪い」と決めつけ、現状を変えるための努力を怠っていた。だが本当は、彼らもグレたくて不良になったわけではない。そうならざるを得ない理由があったのだ。「報われない」と思うのは、事実報われる資格のない自分自身であることに他ならない。すべては、プロ意識の足りない自分の問題だったのだ。教職を自ら選び志願したことの対価が「報われない」「理不尽だ」と感じることの不甲斐なさに、ようやく気がついた。厄介者の木材が、棟梁の腕によって生まれ変わるように、どんなワルでもその子の本質

を見抜き、やる気を出させるのが教師の役目である。もう一度、目の前の生徒と真摯に向き合ってみよう。そう決意した。

その後なんとか復帰した私は、一人ひとりの生徒と根気強く関わるように努めた。たとえ反抗され暴言を吐かれても、何度裏切られても、「いつか分かってくれる時が来れば……」と信じて、こちらの思いを伝え続けた。当然お互いすぐに変わることはできなかった。それでも諦めずに見放すことなく関わり続けるうち、少しずつ変化が見られるようになった。授業を聞こうともしなかった生徒が、一瞬だけ食いついてくれた。ほとんど登校できなかつた生徒が、短時間でも学校に来てくれるようになった。そんな些細な変化が希望となり教師としてのやりがいも感じるようになってきた。どんな生徒も、成長する機会を待っている。きっかけさえ与えれば、飛躍的に伸びる可能性を秘めている。その能力を見つけて活かすことができるのは、周りの大人である。厄介者の生徒たちは私にたくさんのお話を教えてくれた。辛さに耐えたぶんだけ強くなり、人の痛みも分かるようになるのだろう。アテが互いに支え合って思いがけない力を発揮するように、私たちも案外相性が良かったのかもしれない。

自ら縁をたぐり寄せるようにして、立國寺を訪れたあの時から約十年。現在、教師になって十三年目を迎える。「厄介者」と言ってもいろいろタイプがあり、その扱い方はいまだによく分からない。時には互いの思いが通じ合わず衝突し、手を焼くこともある。職人たちが寺院や塔の建材を手入れするのに、三百年という

年月を念頭に入れることを思えば、まだまだ一人前というにはほど遠い。これからもあらゆる差別や偏見、無知無関心を敵に回し、闘う日々は続くだろう。いまだに理想と現実の隔たりに落ち込み、脱力徒労感に襲われることもある。だが、そうした苦労や失敗、辛い経験の一つひとつが、自分の中で大切な養分となり、成長するための土台となっているのだろう。

春になったら、無事に再起を図ることができたお礼参りをしに、もう一度立國寺を訪れようと思っている。美しい四季の変化に富んだ山寺の自然は、今度はどんな姿を見せてくれるだろうか。

生きている限り、これからも傷つくことや辛いことはたくさんあるだろう。それでも私は、アテとして粘り強く生きていく。